

12 (火)

大胆に恵みの御座へ

へブライ人への手紙四章14〜16節

それゆえ、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜に合った助けを受けるために、堂々と恵みの座に近づこうではありませんか。(16)

主イエスが大祭司であるということは、イエスが私たちと父なる神との間に立って執り成しておられるということです。神の子でありつつ人となられたお方であるゆえ、両者の間に立って完全な執り成しができるのです。それだからこそ、この大祭司を信頼して、「堂々と恵みの座に近づこうではありませんか」と著者は私たちに勧めます。遠慮しないで大胆に近づこうと仰うのです。こう語るのは、私たちは神の前に出ることを躊躇することがあるからです。自らの罪の深さに打ちひしがれ、こんな私はとても神の前に出ることなど出来ないと思ってしまうのです。神の光に照らされて、罪の自覚を持つことは大切なことです。だからといって、神の前に出ることを尻込みしてはなりません。大祭司なるキリストがおられるからこそ、私たちは大胆に恵みの座に近づくことができます。